「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：洋野町立種市中学校

Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

本校は、岩手県最北端に位置し、西部には山間部、東部には太平洋が広がる自然豊かな地域にある。天然のコンブなどをエサにして育つウニやアワビが豊富に採れ、地域の基幹産業となっている。2011 年の東日本大震災では、人的被害こそなかったものの、基幹産業の１つであるウニの栽培センターが壊滅するなどの被害があった。本校生徒の保護者のなかには、漁業関係者も少なからずいたことから、生徒への心的影響はあったと推測される。現在は復興も進み、震災前の洋野町の姿が取り戻されつつある。

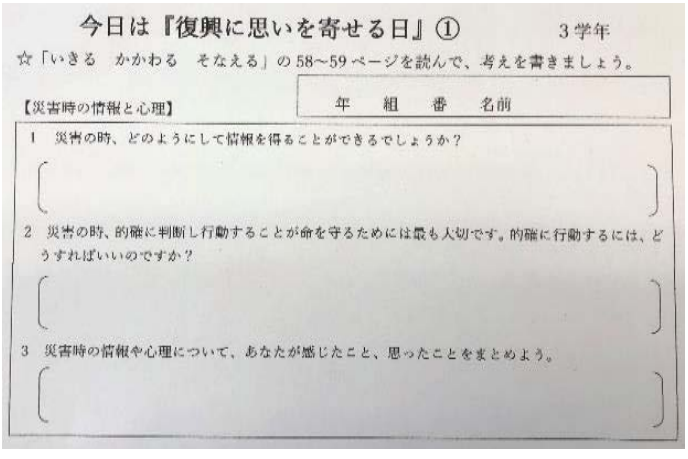
本校では「浜清掃」と「復興に思いを寄せる日」を復興教育の柱としている。学区内の海岸を全校で清掃する「浜清掃」に生徒たちは毎年熱心に取り組んでおり、地域に対する愛着を深めている。さらに今年度は、事前に環境・海洋に関する講演会を行い、全校生徒の環境・海洋に対する理解、意識を高めたうえで浜清掃に取り組んでいきたいと考えている。

また、本校では毎月 11 日を「復興に思いを寄せる日」と設定している。これは東北地方沿岸地域に物心共に甚大な被害をもたらした東日本大震災を忘れないという目的で行っている。毎月 11 日の朝読書の時間に副読本『いきる　かかわる　そなえる』を全校で読み、感想をまとめるという取組である。生徒が書いた感想を共同スペースに掲示するなど震災・復興に対する互いの思いや考えを共有することで、故郷種市を愛し、その復興・発展を支える人材育成につなげたいと考えている。

Ⅱ　取組の概要

1 「復興に思いを寄せる日」

毎月 11 日を「復興に思いを寄せる日」と設定し、朝読書の時間に『いきる　かかわる　そなえる』を読んだ。簡単な設問プリントを設けることで全員が意欲的に復興について考えることができた。また、この取組を通して、震災を風化させてはいけないという意識を高めることができた。



今日は『復興に思いを寄せる日』①　3学年

☆「いきる　かかわる　そなえる」の 58～59 ページを読んで、考えを書きましょう。

【災害時の情報と心理】　年　組　番　名前

1　災害の時、どのようにして情報を得ることができるでしょうか？

2　災害の時、的確に判断し行動することが命を守るためには最も大切です。的確に行動するには、どうすればいいのですか？

3　災害時の情報や心理について、あなたが感じたこと、思ったことをまとめよう。

2　復興・海洋講演会

種市中・角浜小合同で一般社団法人日本キリバス協会代表理事ケンタロ・オノ氏の講演会を聞いた。『誰一人取り残されないために～僕の国キリバスと地球温暖化～』の演題のもと、地球温暖化をはじめとする環境問題、環境保全に対する理解と意識を高めた。キリバスから遠く離れた日本に住む私たちの生活がキリバスに大きな影響を与えていることを生徒は切実に感じていた。

3　「浜清掃」

ケンタロ氏の講演会後、環境への意識が高まっているなかで、例年取り組んでいる「浜清掃」を実施した。同じ太平洋岸に住む一員として海洋ゴミを減らそうという意識で浜清掃を行うことができた。例年に比べ、環境保全に対する意義を深め、活動することができた。

4　種市高校出前授業

種市高校海洋開発科の生徒による出前授業を開催した。専用の実験セットを使用し、津波のメカニズムについて授業してもらった。津波の到達速度を実際に算出することなどを通し、防災に対する意識を高めた。

5　避難訓練

地震を想定した避難訓練を実施した。上級生をリーダーとして、各郊外班ごとに高台への避難を行った。主体的に訓練を行うことで、防災への意識を高めることができた。

高台への避難の様子

6　郷土芸能への取り組み

地域で受け継がれている「海鳴り太鼓」に３年生を中心とする有志で取り組み、文化祭で発表した。また、体育祭では別の郷土芸能「ナニャドヤラ」に全校で取り組み、披露した。どちらの郷土芸能も地域の方の指導のもと取り組みを重ねたことで､郷土への愛着と理解を深めることができた。

文化祭での海鳴り太鼓の発表

地域の方によるナニャドヤラ指導

7　海洋教育こどもサミット in ひろの

洋野町で取り組んでいる海洋教育で学んだことをまとめ、ポスターセッションで発表した。改めて、郷土種市に対する愛着心が形成された。

Ⅲ　取組の成果と課題

1　成果

（1）復興への思い

「復興に思いを寄せる日」を通して、震災の記憶を風化させることなく、意識づけすることができた。

（2）自然環境について

ア　他国が抱える諸問題から地球の環境問題について考え、さらにそれを自分たちの暮らす地域と結びつけて考えることができた。

イ　環境に関する講演会後に「浜清掃」を計画したことで例年より意欲を高めて取り組むことができ、地域の環境保全に対する意識がさらに高まった。

ウ　海洋教育こどもサミット in ひろのを通して、体験したこと､学んだことについて改めて考え、環境問題に対して自分たちに何ができるかを問う機会となった。

（3）郷土芸能について

ア　地域に伝承されている芸能を実際に体験することで、地域理解が深まった。

イ　郷土芸能を体験、鑑賞することで次世代にその文化を継承したいという思いが感じられた。

（4）防災について

避難訓練や種市高校の出前授業を通し、災害が起こるメカニズムや有事の際の行動について改めて考える機会となった。

2　課題

（1）学校統合に係る計画の見直し

町で取り組んでいる「海洋教育」とのつながりを考慮した計画が必要である。来年度の学校統合に向け、地域や生徒の実態に応じた計画の見直しが必要である。

（2）一人一人が主体的に取り組む意識の醸成

学校全体として、年間を通して「復興」に関わる活動を展開することができたが､「個人」として見たときに、一人一人が「主体的」だったとは言えない部分もあった。何のために行っている活動なのかの共通認識を事前に全校でさらに共有していく必要がある。

（3）カリキュラム・マネジメント構築の推進

中学校３年間の見通しをもった計画とともに、各学年の実態に応じた計画と指導の工夫が必要である。特に年間を見通した教科横断的な取組の一層の充実を図る。